

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463629

研究課題名(和文) 男性労働者のソーシャル・キャピタルに注目した職域から地域に繋がる健康支援の研究

研究課題名(英文) Health support systems on male workers from workplace to local community focusing on social capital

研究代表者

小林 敏生 (Kobayashi, Toshio)

広島大学・医歯薬保健学研究院(保)・教授

研究者番号：20251069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は男性労働者を対象とし、メンタルヘルスケアの観点から特にソーシャル・キャピタルおよびワークライフバランスに注目して、労働者の健康感に与える影響を検討することを目的とした質的研究と量的研究を実施した。質的研究の結果、所有するネットワークの多様性や適切なワークライフバランスが主観的健康感の向上に関連していた。量的研究からは、男性労働者の主観的健康感には職場のSCと職場以外のストレスが関連することが示唆された。個人、家庭、職場、地域におけるSC向上、ネットワークの構築、さらに良好なワークライフバランスを保つことが、労働者の主観的健康感の向上やメンタルヘルスの保持増進に繋がることが期待される。

研究成果の概要(英文)：This research was used qualitative and quantitative research methods. This research focusing on social capital and work-life balance for male workers, especially from the view point of mental health care, and to examine the effect on worker's subjective health. Qualitative research finding showed that the diversity of networks and the appropriate work-life balance were related to higher subjective health. Quantitative research suggested that subjective health was associated with workplace social capital and personal stress. The improvement of social capital including networking on individuals, families, workplace, local communities, and maintaining a better work-life balance was expected to improve the worker's subjective health and mental health status.

研究分野：医歯薬学

キーワード：男性労働者 ソーシャル・キャピタル ワークライフバランス 健康管理

1. 研究開始当初の背景

我が国においては、所得や学歴等で見た社会階層が高い者に比べ低い者で不健康が多く、死亡率が高いという「健康格差」が顕著となりつつある。2012年7月に発表された「第2次健康日本21」の中でも、「健康格差」の縮小が目標として掲げられ、それを実現する手段として社会的環境の質向上が指摘されている。この「健康格差社会」に対する対処法として、個人のみならず、職場、地域社会レベルのソーシャル・キャピタル(SC)の向上が注目されている。ソーシャル・キャピタルとは、個人や地域、組織における信頼感、互助性など、社会の協調を促すもので、助け合いのルールや規範、ネットワークなどを指しており、ソーシャル・キャピタルが豊かな所では、お互いが信頼し合い困ったときに助け合うことでストレスを和らげ、健康度が高いという根拠が蓄積されてきている。

一方、厚生労働省による「健康日本21」の最終評価(2011)においては、我が国全体の自殺者数は依然として3万人に上る状態が続いている。性・年代別の自殺死亡率では、50歳代以降の自殺死亡率は減少傾向にあるものの、働き盛り世代(20歳代~40歳代)の自殺死亡率が増加していることが特徴となっており、特に働き盛りの世代に対するメンタルヘルス対策は喫緊の課題となっている。近年、労働者の健康の保持増進のためにはワークライフバランスが重要視されているが、内閣府も「仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発などの様々な活動について、自らが希望するバランスで展開できる状態」と定義して、国家の重要課題として位置付けている(内閣府男女共同参画局「仕事と生活の調和実現度指標について、2008」)(厚生労働省平成20年人口動態統計)。我が国において、経済の活力を維持しつつ、働き盛り世代のメンタルヘルス(うつ・自殺予防)対策という課題を実現するためには、働き方を見直しワークライフバランスを適正化するとともに、希薄化しつつある地域社会との絆やつながりを強化すること、つまりソーシャル・キャピタルの再構築の必要性が指摘されている(内閣府男女共同参画局「仕事と生活の調和実現度指標について、2008」)。我々がこれまでに実施している、高齢労働者を対象とした、ワークライフバランスに関連する研究においても、特に男性労働者の地域との繋がりの希薄化(ソーシャル・キャピタルの低下)がメンタルヘルス不全と関連することを報告してきた(久保陽子、小林敏生、影山隆之、2011)。

2. 研究の目的

近年、労働者のワークライフバランスの重要性が指摘される中で、とりわけ男性労働者においては、会社や家庭との繋がりがだけでなく、地域との繋がりが健康の保持増進において重要であると指摘されており、人の「絆」

や「信頼感」などのソーシャル・キャピタル(SC)(Putnam, Making Democracy Work, 1992)の重要性が注目されており、労働者に対しても、家庭や地域との繋がりを重視したトータルな健康管理やケアの提供の重要性が増している。本研究では、男性労働者に焦点を当てて、労働環境に加えて家庭や地域などの社会環境にも注目して、ストレスとメンタルヘルスケアの観点から健康やウェルビーイングに与える影響を明らかにするとともに、関連する要因を抽出することでより効果的な健康支援に結びつけることを目的とする。将来的には男性労働者のメンタルヘルスをサポートするための職域から家庭、そして地域へと連続するトータルな健康支援の構築を目指している。

3. 研究の方法

調査対象は某製薬会社の工場の20歳~40歳代の男性労働者約500名とする。まず20歳~40歳の労働者から10名程度を年代別に出し、個人、家庭と職場、および地域におけるそれぞれのソーシャル・キャピタル(SC)およびワークライフバランス(WLB)に関連した半構成面接調査を実施し、項目の抽出を行う。

次に、全男性対象者に対して、個人、職場、地域のそれぞれのSCおよびWLBに関する質問票を用いた量的調査を実施し、得られた結果と定期健康診断項目および同時に実施しているメンタルヘルス関連項目(抑うつ度、職業性ストレス、ストレスコーピングなど)との関連性について検討する。

最終年度は、一部の対象者に再度インタビューを実施することで質的エビデンスを高め、質的検討と量的検討から得られた結果を統合し、働き盛りの男性労働者の職場から家庭・地域に繋がる具体的健康支援策の立案に繋げる。

1). 質的インタビュー調査

製薬工場の20歳~40歳代の全男性労働者約400名の労働者から10名(20代;2名, 30代;4名, 40代;4名)を対象として、主観的健康感、個人、職場、地域のソーシャル・キャピタルおよびワークライフバランスに関連して半構成面接調査を実施した。面接は企業内でプライバシーが守られる健康管理センター内の個室で実施し、対象者の了解を得て内容をICレコーダに録音した。面接調査によって得られたデータから逐語録を作成し、比較分析した後にカテゴリー化を行った。インタビューに際しては、労働環境だけでなく家庭や地域などの社会環境に注目して、ストレスとメンタルヘルスケアの観点から健康に与える影響とそれに関連する要因を抽出するように注意した。

2). 量的質問紙調査

20歳~40歳代の全男性労働者559名に対

して、信頼性と妥当性の確保されている既存の SC 尺度および WLB 尺度を用いた質問紙調査を実施した。質問紙調査の実施前に、前年度に実施したインタビュー調査の結果に基づいて、既存の SC および WLB に新たに質問内容を加えた。

得られたデータを量的に解析し、SC および WLB の関連性、および毎年の定期健康診断時に取得している健康診断項目、生活習慣項目および職業性ストレスおよびメンタルヘルスの関連性について検討した。また、定期健康診断時に主観的健康感や生活習慣、職場 SC などについて、自記式質問紙による調査を実施した。

3). 質的インタビューによる再調査

初年度に実施した質的インタビュー対象者以外の労働者 10 名を選別し、半構造化面接調査を再度実施した。同意が得られた者に対して半構造化面接を実施することで実態を詳細に掘り下げ、質的エビデンスを高めた。20 歳～40 歳の男性労働者から再度 10 名を選定し、特に主観的健康感とソーシャル・キャピタル (SC) との関連性に注目してインタビューを実施した。

前年度に得られた質問紙調査の結果と面接調査によって得られた結果を総合的に検討し、男性労働者の健康保持増進に影響を与える、職域から家庭、さらに地域に繋がる SC の詳細について明確化した。

4. 研究成果

1). 質的インタビュー調査:

得られた結果として、ネットワークへの参加については、主観的健康感の高低に関わらず、「近隣住民との挨拶や清掃などの活動はあるが、プライベートな関わりはない」という語りが多かった。長時間を職場で過ごす男性労働者にとって、地域でネットワークを作る機会がない、もしくはネットワーク作りを重要視していないことが示唆された。ネットワークの数や人とつながる頻度ではなく、家庭や職場外でも自分にとってプラスの居場所を持つことが精神的健康度を高める一因となると考えられた。その他、男性労働者の語りから得られた職場・地域におけるネットワークの種類を図 1 に示した。

また、主観的健康感が低い群からは、「以前は子供や家族と趣味や活動を共有して一緒に過ごしていたが子供の成長とともに一緒に行う活動がなくなった」という語りがあったことから地域との繋がりの変化が主観的健康感に関連する可能性が示された。

一方、主観的健康感の高い群では仕事-家庭関係でポジティブな影響に関する語りが多かったことから、男性労働者にとって、仕事をする上で家庭があることは精神的に大きな支えであることが推察される。一方で、ワークライフバランスとしての仕事-家庭関係を良好に保つための対処行動としては、家

族を気遣い自己解決する傾向を認めた。

主観的健康感の高低と SC の関連性は必ずしも明確にはならなかったが、男性労働者が地域と繋がるきっかけは、子どもを通しての活動が多かった。ワークライフバランスを良好に保つための対処行動が主観的健康感と関連がある可能性が示唆された。

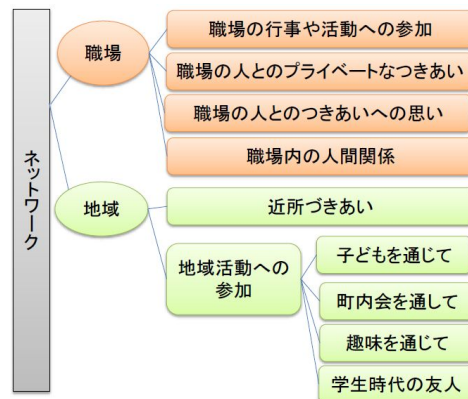


図 1. 男性労働者の職場・地域におけるネットワーク

2). 量的質問紙調査:

得られた男性労働者 559 名のデータのうち、欠損データを含む 18 名を除外し 541 名を分析対象とし、対象者の主観的健康感を健康群、不健康群の 2 群に分類して、ロジスティック回帰分析を用いて関連要因の検討を行った。主観的健康感については健康群 438 名、不健康群 103 名であった。ロジスティック回帰分析の結果、主観的健康感には職場 SC、仕事以外の悩みの有無と関連を認め、健康群の職場 SC のオッズ比は 1.17、仕事以外の悩み無しのオッズ比は 2.38 で有意に高かった。一方で、家族との同居の有無や残業時間の長さ、喫煙・飲酒習慣の有無は主観的健康感との関連を認めなかった (表 1)。

以上より、男性労働者の主観的健康感には職場のソーシャル・キャピタル (SC) や職場以外のストレスが関連することが明らかとなった。特に仕事以外の悩みがない人は、ある人に比べて健康群が 2.38 倍多いことから、職場の人間関係を含む SC に加えて、家族の問題も含む仕事以外の悩みに対する対応も、主観的健康感を向上させる重要な因子であることが推察された。

表 1. 主観的健康感の高低に関連する要因

	偏回帰 係数 B	有意確 率	Exp (B)	EXP (B) の 95%	
				信頼区間 下限	上限
職場 SC	.155	.005	1.167	1.048	1.300
仕事以外悩みなし	.865	<.001	2.375	1.498	3.765
残業時間	-.004	.313	.996	.988	1.004
1 日平均睡眠時間	.084	.559	1.088	.820	1.444
喫煙	-.338	.154	.713	.448	1.135
飲酒	-.004	.915	.996	.922	1.076
同居有無	.098	.699	1.103	.673	1.807
定数	.033	.964	1.033		

3). 質的インタビューによる再調査

20歳～40歳の男性労働者から再度10名を選定し、特に主観的健康感とソーシャル・キャピタル(SC)やワークライフバランスとの関連性に注目してインタビューを実施した。結果、主観的健康感が高い者からは、SCの信頼感や互酬性の語りが多かった。またネットワークの種類が多く、所有するネットワークの多様性が主観的健康感に関連する可能性が示唆された(表2, 3)。さらに、家庭における夫婦関係・子供との繋がりが多いのは子供を通じた地域との繋がりが多数抽出されたことから、これらが主観的健康感の高さに関連することが示唆された。ネットワークは、単にその数や頻度だけではなく、職場や家庭、および地域において自らが能動的に取り入れ、参加することが重要と考えられる。

表2. 主観的健康感の高低別の信頼感・互酬性に関する語り

サブカテゴリー	コード(語り)	
	健康群	非健康群
〈職場における信頼感・互酬性〉	ほぼ完全に信頼している / 完全に信頼できる人はいない 自分に部下ができたときに部下に仕事を任せられないタイプだと思う 忙しい中で他の人を手伝うことができていないが、その状況が改善されれば良いと思う	あまり信頼できない / 口では任せたとやっているが何回も確認している 仕事で困ったらお互いサポートし合っている / 行き詰ったことが発生したら相談する
〈家庭における信頼感・互酬性〉	家族に対しては心を許している部分がある / 職場よりも家族への信頼感の方が高い 妻から相談されることはある / 夫婦で助け合っている感じは10点満点中9点くらい	妻は結構信頼している / 子どもは10点満点の5とか3 愚痴を妻や子どもに言うのはかわいそうなのでほとんどしてない
〈世間一般に対する信頼感・互酬性〉	どちらかというと信頼できる / 相手を観察してどのような距離で接するか見極める / 信頼できるかどうかは間柄や人によって異なる 困っている人がいたら手を出さずタイプ / 困っている人がいても見て見ぬふりをする人もいると思う	信じようと思っているが実際にはできていない / 疑い深い性格で何度も確認する 信頼できるし、人は役に立とうとしていると思う

表3. 主観的健康感の高低別のネットワークに関する語り

サブカテゴリー	コード(語り)	
	健康群	非健康群
〈職場の人間関係〉	人間関係は良いと思う/普通だと思う/うまくいってないと思う 職場環境や人間関係について小さい問題は色々あるがいちいち考えない	職場の人間関係は良いと思う/職場だけでなく工場全体で人間関係は良いと思う
〈仕事の悩みの相談相手〉	仕事の悩みは職場の人が一番分かると思う / 学生時代の友人など職場外の友人に相談する 職場の上司や同僚に相談する	職場の上司や同僚に相談する できるだけ自分で対処するようにして行き詰ったら相談する
〈町内会を通しての地域との繋がりが〉	秋のお祭りで見物や遊びをする/消防団に所属している 町内会に積極的に関わろうという意識がなかったら聞かない 町内会はあるが自分は参加していない/地域活動をしていない	町内会活動は盛んで自分も参加する
〈近所/社宅や寮での付き合い〉	近所付き合いは特になし挨拶をする程度 社宅の自治体で集会など何か集まる必要があるときは集まる/社宅で持ち回りの清掃をする	近所の人とよく話をするが、何か一緒に活動することはない
〈子供を通しての地域との繋がりが〉	子供のクラブ活動の行事に参加する おやじの会に参加する(月に1回会合で2~3か月に1回は飲み会があり、行ける時に参加する) 保育園の親御さんと挨拶はするがプライベートな関わりはない 子供が成長して増える地域や学校の活動に積極的に参加したいとは思わない 子どもが生まれたら増える地域活動は正直面倒だ	子供が成長してから子供会やクラブ活動から離れると自分も地域とのつながりが疎遠になった 妻が子供会の役員(子供会、PTA)をしていたため自分も手伝いをした おやじの会はやるべきだと思うがフォロワー的な感じでやっていた
〈学生時代の友人との繋がりが〉	実家に帰った時に学生時代の友人と飲みに行く 今住んでいる場所が地元なので地元の友人と頻りに会う(飲み会、草野球のチーム)	なし
〈地域の人との直接的な繋がりが〉	バドミントンの同好会や社宅の集まり以外に地域での活動はない 合唱の仲間が遠方にいる	なし
〈職場の行事や活動への参加〉	誘われたら仕事後や休憩時間に工場内の施設で卓球をする	なし

4). まとめ

本研究では、男性労働者を対象として、ストレスとメンタルヘルスケアの観点から特にソーシャル・キャピタルおよびワークライフバランスに注目して、質的研究と量的研究

を行い、労働者の健康感に与える影響を明らかにすることを目的とした。

質的研究からは、所有するネットワークの多様性や適切なワークライフバランスが主観的健康感の向上に関連する語りが得られた。量的研究からは、男性労働者の主観的健康感には職場のSCと職場以外のストレスが関連することが示唆された。職場のSCに加えて、家族の問題などの仕事以外の悩みに対する対応も、主観的健康感を向上させる要因であると考えられた。

個人、家庭、職域、地域でのSC向上、ネットワークの構築、さらに良好なワークライフバランスの促進によって、労働者の主観的健康感の向上やメンタルヘルスの保持増進に繋がることが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. Bonkohara Itsuko, Yoko Kubo, Toshio Kobayashi: Correlation between Occupational Stress, Lifestyle, and Hyperglycemia among Obese and Non-Obese Middle-Aged Japanese Male Workers. Health, 8: 1082-1088, 2016 (査読有)

〔学会発表〕(計7件)

1. 小林敏生, 久保陽子, 田淵啓二, 影山隆之: 男性労働者における精神健康度への影響要因 ポジティブ因子に注目して 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪市, 2016年10月26日-28日

2. Norikoshi K, Kobayashi T, Takase M, Tabuchi K, Kondo H, Shiraki T, Isomura Y, Yamada T: Factors which promote social capital in the workplace of clinical nurses, 31st International Congress on Occupational Health, Seoul, Korea, May 31-June 5, 2015

3. 小林敏生, 久保陽子, 吉浦恵美, 影山隆之: 男性労働者の主観的健康感とソーシャル・キャピタルに関するインタビュー調査, 第88回日本産業衛生学会, 大阪市, 2015年5月13-16日

4. 山内加奈子, 小林敏生, 加藤匡宏, 水重克文: 壮年期労働者における各種ストレスに関連する生活習慣の検討, 第88回日本産業衛生学会, 大阪市, 2015年5月13-16日

5. 久保陽子, 八橋孝介, 小林敏生: 男性労働者のソーシャル・キャピタルと仕事 家庭関係の特性, 第73回日本公衆衛生学会総会, 宇都宮市, 2014年11月5-7日

6. 久保陽子, 小林敏生 : 妻の就労の有無による未就学児を育児中の父親の精神的健康度に対する仕事 家庭関係と SOC の関連, 第 78 回日本民族衛生学会総会, 佐賀市, 2013 年 11 月 15-16 日

7. 久保陽子, 小林敏生 : 仕事と家庭の多重役割を持つ親の SOC とソーシャル・キャピタルの関連, 第 86 回日本産業衛生学会, 松山市, 2013 年 5 月 14-17 日

〔図書〕(計 1 件)

1. 影山隆之, 小林敏生
「ストレス」との向き合い方 BSCP によるコーピング特性評価から見えることー
2017, 金剛出版 152 頁

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 敏生 (KOBAYASHI TOSHIO)
広島大学・大学院医歯薬保健学研究院・教授
研究者番号 : 20251069

(2) 研究分担者

影山 隆之 (KAGEYAMA TAKAYUKI)
大分県立看護科学大学・看護学部・教授
研究者番号 : 90204346

久保 陽子 (KUBO YOKO)
産業医科大学・産業保健学部・助教
研究者番号 : 90412668

高瀬 美由紀 (TAKASE MIYUKI)
安田女子大学・看護学部・教授
研究者番号 : 50437521